

## 平成 27 年度「オリンピック・パラリンピック教育モデル推進校」 事業実施報告書

- I スポーツへの誘い 自己肯定感の醸成  
 II 障害者や高齢者への理解 共生社会の形成  
 III スポーツへの関心や競技力向上 スポーツボランティアへの参画  
 IV オリンピック・パラリンピックに向けた京都の伝統や文化等の発信  
 V 児童生徒オリンピック、パラリンピックを通じた国際理解教育の推進

実践事業	【 Ⅱ 】	I～Vを記入して下さい。	
学校名	京都市立大宅中学校	全校生徒数	369名
実践学年、部、講座等	第1学年 (男子 55名・女子 60名) 第2学年 (男子 55名・女子 56名) 第3学年 (男子 65名・女子 78名)		
目 標 (ねらい)	オリンピズムの観点(○印) <重複可>	友情 ( ) 卓越 ( ○ ) 尊重 ( ○ )	
	肢体の不自由な人への対応について、その心構えなどを学び、社会福祉への理解を深め、人権尊重の意識を高める。		
実践内容	1.京都市教育委員会 体育健康教育室参与 坂野晴男様より日本とドイツでの車いすバスケットの試合の映像を見て、解説もしていただいた。生徒の車いすバスケットへの関心を高めることができた。 2.車いすバスケット 山本英嗣選手より苦労話やうれしかったことなど様々な体験談を聞き、人とのつながりが自分が生きる原動力になったことをわかりやすく話していただいた。さらに車いすバスケットの実技を見せていただき、バスケットボール部員が参加しての交流も行った。		
実施上の留意点等	1.プロジェクターを活用して、映像を見やすくできるようにした。 2.車いすバスケットの実技を見るために生徒の座席配置を工夫した。 3.バスケットボール部員が参加しての交流を体験させた。 4.生徒会長に全校生徒を代表してお礼の言葉など述べさせた。		
主な成果 (分析結果)	・生徒の感想として、次のようなものがあった。 「山本さんは、とても明るく、笑顔が印象に残りました。しかし、あんなにつらく苦しい過去があったなんて今の様子からは考えられません。やはり訓練施設での仲間やバスケットで知り合った仲間のお蔭なのでしょう」 「障害のある人の立場になって話したり、考えたりすることが大切だと思います。自分が思ったことを率直に伝えるのではなく、『この言い方をしたら、この人はこう思うだろうな』としっかりと『思い』を大切にしたいほうがよいと思います。」		

「車いすバスケットは、車いすなのにあんなに軽々と動いてシュートを打ったりして本当にすごいと思いました。座った状態でシュートを打つのはとてもゴールが高いし、足の力を使うことができないので、どうやったらあんなに入るんだろうと思いました。」

「前で、実際に車いすに乗って体験させていただいたのですが、とても難しいものでした。スポーツを通して仲間との絆を深めることの大切さを感じました。」

「障害のある人に対して『かわいそう』というのは、ちょっと違うかなと思います。障害のある人に出会った時には1人の人間として向き合っていきたいです。」

「普通にスポーツをしている人でさえ、しんどい気持ちになるときがあるのに、車椅子となると、それ以上の力があるので、ものすごく負担になるんじゃないかと思います。」

「体の一部が動かなくても、努力をすれば、車椅子でも外に出て生活したり、スポーツをすることができるんだと思いました。」

「障害者用にルールもドリブル1回したらタイヤ2回触っても良いという新しいことも取り入れられているけど、それ以外は、障害者だからといって厳しくないというのがなく、障害者でも健常者でも同じように全力で取り組んでいることが分かりました。」

「印象としては、自転車で道をふさいだり、ガムを捨てる、つばを吐くなどの行為は、いろいろな人に迷惑をかけているという事実を改めて分かりました。」

「一つの事に夢中になれることは、とてもいい事だと思うし、車椅子でも一生懸命頑張ろうとしている姿はとても凄いなと思いました。」

「普段から自転車を置くところをよく考えたりできると思ったし、人にも言えるようになりたいです。」

「スポーツは、絆を深め、人と人をつなぐからです。スポーツをすることは、心を前向きにしたり、リフレッシュしたり等、たくさんの良いことがあることを実感しました。」

※生徒の感想から生徒の意識の高まりを感じる。また、車いすバスケットボールの卓越した技能を体験した結果、人権尊重の意識向上に役立てることができた。今回の人権学習を通して障害のある人への理解をさらに深めてほしい。

主な課題等  
 できれば来年度以降もこのような障害のある人への理解を深める取組をすすめたい。構想としては、「視覚障害のある人への理解」「聴覚障害のある人への理解」「肢体の不自由な人への理解」を一つのサイクルとして進めていきたい。講師の方をどのように確保していくかが課題である。

